

震災を機に生命を見つめ直し、改めて地域の酪農の原点を知る ～福島県南相馬市の酪農家の軌跡～

調査研究部 震災復興調査班

(文責：研究員 阿部山 徹)

目次

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1. はじめに | 6. 救えなかった放れ牛たち |
| 2. 地域づくりは人づくり | 7. 震災を機に変化した「生命」観 |
| 3. 飼料作物栽培に適した大富地区 | 8. 改めて知る南相馬の酪農の原点 |
| 4. 酪農は家族とともに | 9. おわりに |
| 5. 衝撃を受けた牛がかじった柱 | |

1. はじめに

福島県南相馬市¹は、東日本大震災により、地震・津波・放射性物質による被害に遭いました。南相馬市の中でも南に位置する小高区^{おだか}では、ほぼ全域が福島第一原子力発電所から20km圏内(図)に含まれ、避難指示解除準備区域²等に指定されています。未だに小高区の住民は地区外への避難を余儀なくされ、これまで実証試験以外に農業は行われていません。

被災から間もなく4年が経過しようとしています。小高区では空間放射線量が下がってきており、約1年後の平成28年4月に避難指示解除準備区域の避難指示が解除され、一部の地域で住民の帰還や農業の再開が可能とな



(図) 避難指示区域の概念図
(経産省ウェブサイトより)

1 南相馬市は平成18年1月1日に、鹿島町・原町市・小高町の3市町が合併して誕生した。合併後、市の中に鹿島区・原町区・小高区の3つの地域自治区を設けている。市の人口は、平成23年3月11日(東日本大震災発生時)71,561人。平成27年1月5日現在53,565人となっている。未だに多くの住民が市外へ避難している(南相馬市ウェブサイトより)。また、震災直後の人口は1万人を切った時もあったという(山岡(2012)より)。

2 現在小高区全域は、避難指示解除準備区域(年間積算線量が20ミリシーベルト以下となることが確実であることが確認された区域)、居住制限区域(年間積算線量が20ミリシーベルトを超えるおそれがあり、住民の被ばく線量を低減する観点から引き続き避難の継続を求める地域)、帰還困難区域(5年間を経過してもなお、年間積算線量が20ミリシーベルトを下回らないおそれのある、年間積算線量が50ミリシーベルトを超えている地域)のいずれかの区域に指定されている(区域の解説は農林水産省「平成25年度 食料・農業・農村白書」より)

る予定です。しかし残念ながら、小高区民の帰還や農業の再開に向けたモチベーションは上がっていないのが現状です。

そのような中、本誌126号（平成25年4月）で紹介した南相馬市小高区大富地区の酪農家であり、NPO法人懸の森みどりファーム理事長の半杭一成³氏（65歳）は、小高区での酪農の再開に向けて、牛の餌となる飼料作物の実証試験に取り組んでいます。

本稿では、半杭氏の半生と震災を機に改めて見つめ直した、命や地域に対する思いをインタビュー（以下2.～8.部分）を通して紹介します。



半杭一成 氏

2. 地域づくりは人づくり

私たちの時代、農家の長男は農学校に進むのが当たり前だった。地元の相馬農業高校から県立農業短期大学に進み、卒業した昭和45年に就農した。

私の家ではその年に初めてホルスタイン2頭を導入し酪農を始めた。酪農を始めようと思ったのは、父親がやっていた水稲と養蚕、

養豚の経営では生活が大変だったからだ。酪農経営を始めるにあたり、特に大きな支えになったのが地元の「大富酪農研究会⁴」であった。先輩には本当によい指導をしてもらった。今でも感謝の気持ちでいっぱいだ。当時、酪農は毎日仕事があり大変だと思ったが、毎月1回収入があるということが魅力的だった。米だと年に1回、養豚は出荷した時だけしか収入がない。その当時は貧しかったゆえにそう思ったのかもしれない。酪農をすることは自分で決めた。牧歌的なものに憧れていたということもある。

私が22歳の時に父親は46歳で亡くなった。ここまで酪農をすることができたのは、大富酪農研究会という組織があったからだ。そこには共同で出資した機械があり、それを共同で使うことで経営が成り立った。あの研究会がなかったら今の私の酪農はなかった。先輩たちについていけばよかった。先輩たちは地域で農業委員等を務め、リーダーとしても活躍していた。だから「地域づくりは人づくり」とつくづく思う。

3. 飼料作物栽培に適した大富地区

大富地区は小高区の中でも山間部にあり⁵、平場に比べると米の収量が少ない。だから米を作って生計を立てていた人はいなかった。この地区は昔から養蚕が盛んなところだったが、私が就農した昭和45年頃には、日本の養蚕業は輸入生糸に押され、養蚕が盛んだったこの地区ですら養蚕農家は5、6戸に減っていた。

3 現在、半杭氏は小高区から避難し原町区に住んでいる。

4 昭和43年に集落内の酪農家有志が集まり、規模拡大と粗飼料の自給率100%を目指した酪農技術改善を目標に発足した。震災直前の研究会は5戸の農家からなる。半杭氏が最年長（65歳）で最年少は現在49歳。

5 大富地区は小高区の海岸部から西側に約6kmのところに位置する。

酪農は小規模だが戦後からあった。この地区で酪農が可能だったのは、比較的田畑を多く所有していたからだ。その当時の乳牛は高価だった。

就農した時に減反が始まり大富地区では同時に水田の基盤整備事業も始まった。水田転作奨励金等を活用しながら飼料作物を栽培した。また、この地区では里山を開墾して飼料畑に変えていった。施策を活用し、飼料作物をたくさん作れたことが、酪農の規模拡大につながった。この地区の酪農の強みは、年に2回飼料作物が作れること、飼料の自給率が高いことだった⁶。私が米を作ったのは、就農してから数年間しかない。養豚もやめ、後は酪農しかやっていない。

飼料作物づくりをされていて一番嬉しかったことは、忙しい時や雨が降りそうな時など、研究会のメンバーがトラクターで追いかけてきて、牧草の刈り取り、反転、集草等を手伝ってくれたことだ。私も何も言われなくても、よく仲間の作業を手伝った。仲間がいるというのはいいことで、普段は共同で機械を使用し、お互いの作業工程をよく把握しているからこそできることだった。

震災前の経営は自分の水田3haのほかに、受託地を合わせると15haで飼料作物を栽培していた。牛舎では搾乳牛30頭、育成牛10頭を飼っていた。牛は多い時で60頭ほど飼っていた。

4. 酪農は家族とともに

牛舎での作業は母親と2人で行っていた。妻は役場に勤めていたが、同じ大富地区の酪農家の出身だったので、酪農の手伝いもよくしてくれた。

母親は平成3年に倒れて入院し、自宅で介護・看病した後、平成5年に63歳で亡くなった。あの時は、3人の子どもたちが高校生、中学生で子育ての真っ最中だった。毎日が大変だった。今のような介護制度もなく、酪農ヘルパーもこの地域にはいなかった。今後、子供たちは大学に行くだろうから、役場に勤めていた妻を辞めさせて酪農や介護をやらせるわけにもいかなかった。とにかくこの子どもたちを一人前に教育しなければということとで頑張った。長男は高校から帰宅後、搾乳を手伝ったりしてくれた。あの時は大変だったが酪農は自分で選んだ道であり、辛いと思っただことはなかった。

酪農をしていると、毎日朝と晩2回搾乳をするので遠くに遊びに行くことができない。冠婚葬祭の時ですら牛の世話の方が優先だった。しかし、酪農をしていると、いつも家族と一緒にいることができた。いつも牛舎とかで子どもたちと一緒に遊んでいられた。それが私にとって酪農の魅力でもあった。子どもたち3人は牛に助けられて育ち、大学まで出すことができた。「牛さんありがとう」という気持ちでいっぱいだ。

しかし、毎日一緒に過ごす牛に愛着はわくが、やはり経済動物なので、割り切りも必要だ。死亡事故もある。頻繁に乳房炎を起こす牛などは乳牛としての価値が低いので処分しなくてはならない。

5. 衝撃を受けた牛がかじった柱

東日本大震災が発生した時は、トラクターに乗っていた。ものすごい揺れでトラクターから降りられなかった。長い揺れだった。14

6 地区の酪農用の飼料の自給率は約7～8割。子牛用の餌となる乾草は日本には適したものがなかったので、輸入の乾草を使用した（半杭氏談）。

日には福島第一原子力発電所3号機が水素爆発し、その後、家から避難を余儀なくされた。牛たちを置き去りにして餓死させてしまった。

震災から5か月後の8月に私の牛舎を整理するため一時帰宅した。牛のミイラ化は話には聞いていたが、とても怖くて見られなかった。牛舎内から牛の死骸を運び出すことは大変な作業だったので機械を使った。ようやく牛をすべて引き出しが終わってから、餓死した牛たちが、ひもじくてかじって細くなった牛舎の柱のことに気がついた。私と和牛農家の2人がその場所にいたが、この柱を見た時、一瞬、黙りこんでしまった。後で見ると、どこの牛舎にもこのような細くなった柱はあった。その時に引き出した牛の死骸は放射性物質の濃度が高くなく、埋却許可基準値（8000ベクレル/kg）以下だった。家畜保健衛生所の立ち会いのもと、自分の牧草地に穴を掘り牛の死骸を埋めた。

私の妹が仙台にいるが、動物愛護団体が震災後、残された動物たちの写真展を開いたそう。その場に「福島の酪農家は牛を置いて



餓死した牛が、ひもじさのあまりかじって細くなった柱（半杭氏牛舎）

逃げた」と書いてあった。よほど文句を言おうかと思った。私たちは牛を置いて逃げたのではなく、避難指示が出たので、牛を置いて行かざるをえなかったのだ。

6. 救えなかった放れ牛たち

酪農の再開と「放れ牛⁷」の保護を目指して平成24年に仲間とともにNPO法人懸の森みどりファームを立ち上げた。当初は放れ牛の研究調査を行っていた大学や研究機関から法人への助成があり、牛の餌代や管理費などに充てていた。しかし、最近では大学の研究調査も終わり、餌代にも困るような状況になっていた。放れ牛を支援してくれる団体も見つからなかった。平成28年4月に小高区では避難指示解除準備区域が解除される予定だが、そこまで仲間をボランティアとしてつないでおくわけにはいかない。ここで一度リセットして前に進もうと考えた。南相馬市と大学教授等とも協議した結果、放れ牛の安楽死処分もやむを得ないということになった。昨年10月に市、大学、家畜保健所の立ち会いのもと、最終的に残った31頭を安楽死処分した。安楽死させた牛たちは岩手大学と東北大学の先生方により検査解剖された。そして今、飼っている牛は1頭もいなくなった。

7. 震災を機に変化した「生命」観

震災前と震災後では、生命というものに対して感覚が変わった。多くの牛の死骸を見て、「命は万物全てに宿っている」という感覚が以前よりも強くなった気がする。動物ばかりでなく、考えてみれば植物だって種を播き、花が咲き、実が実り、次に受け継がれている。

7 原発事故の後、牛舎に置き去りにされたが自力で牛舎から脱出した牛。または農家が意図的に離れた牛のこと。高い放射線をあびて被曝したため、放射線による被曝の影響に関する調査がされた。

すべてそのように感じられるようになった。生命というのはこういうものなのだと感じられる。

牛たちには申し訳ないことをした。牛舎の柱の写真は常に持ち歩いている。ずっと肌身離さず持ち歩いていたら写真がボロボロになってしまった⁸。



持ち歩いてボロボロになった、牛舎の柱の写真

8. 改めて知る南相馬の酪農の原点

思えば、震災前の南相馬では耕畜連携して地域で資源が循環していた。地域で資源が循環しないと南相馬の酪農は成り立たないと震災後改めて実感した。

酪農は粗飼料として牧草の他、デントコーン⁹、ソルゴー¹⁰、稲わらを使う。また敷きわらとして稲わらやもみ殻を使う。地域の稲作農家との連携が欠かせない。敷きわらは使用

後、家畜の糞尿と混ぜ発酵させれば堆肥として園芸農家にも供給することができる。それは糞尿処理対策にもなる。このように酪農は地域農業全体が復興して連携してこそ初めて成り立つ。

今後の地域での飼料作物づくりに向けて、私が理事長を務める法人では、昨年、一昨年と（公財）浦上食品・食文化振興財団からの支援を受けて飼料作物の実証試験を行っている。並行して、南相馬市農政課とは、今年度事業で資源エネルギー作物としてソルゴー（50a）とデントコーン（4.5ha）の実証試験を行った。収穫した飼料作物の放射性物質を測定・分析したところ、30～100ベクレル/kgという結果が出た。飼料として南相馬市（原町区・鹿島区）の酪農家に供給する予定だったができなかった。30ベクレル/kgという基準値を超えてしまったためだ。今回は意識的に除染をしていない農地で実証試験を行った。このような農地で飼料作物を栽培しても、放射性物質の数値はもう少しで基準値をクリアできるところまで下がってきているところもある。

収穫した飼料作物は、バイオマスとしてエネルギーに利用する話もあるが、私としては飼料として牛に食べさせたい。畜産農家だから飼料作物を牛に供給できれば嬉しい。

私としては、この地域では飼料作物を作り、できるだけ家畜の餌を自給しないと酪農をはじめとする畜産が成り立たないと思っている。飼料作物の放射性物質はどのくらいのレベルの数字になるのか、何年も作付けして数

8 インタビューの途中、半杭氏は自分のバッグから1枚のボロボロになった写真を取り出した。この写真をいつも肌身離さず持ち歩いている半杭氏の今も続く牛たちへの後悔の心境を表した象徴的な場面であった。

9 飼料用トウモロコシの一種。

10 ソルガム属の飼料作物。バイオマス資源としても注目されている。

字を積み上げて安全性を実証していきたいと考えている。

9. おわりに

半杭氏は最近、酪農ヘルパーとして南相馬市原町区の知り合いの酪農家の手伝いに行く機会があるそうです。「まだ昔の仕事ができる。作業をしていると動きにリズムが出てくる」と、改めて牛に触れ酪農に携わる喜びをかみしめていました。

一方で、南相馬から避難している仲間の酪農家が、長い間酪農の現場から離れ本当に酪農を再開できるのかという不安も口にされていました。

震災後、農業を行っていない南相馬市小高区で、酪農はじめ農業を再開、復興することは容易なことではありません。しかし、半杭氏は震災を機に生命を見つめ直し、動植物の命の大切さだけでなく、酪農をはじめ農業は動植物の命の営みによって成り立っていること、そして、南相馬の酪農の原点は地域資源の循環や高い飼料自給率にあることに改めて気づかされました。

まずは飼料作物づくりから始める。そこにはこの南相馬で酪農家として生き、被災を経験した半杭氏だからこそ分かる南相馬に適した酪農の復興の手掛りを示しているのではないのでしょうか。半杭氏の挑戦は今後も続きます。引き続き現地調査を進めてまいります。

(謝辞)

大変お忙しいところ、聞き取り調査にご協力いただきましたNPO法人懸の森みどりファーム理事長の半杭一成氏に、この場を借りてお礼申し上げます。

(参考資料)

- ・福島県南相馬市ウェブサイト
(URL: <http://www.city.minamisoma.lg.jp/> 2015. 1. 27参照)
- ・経済産業省ウェブサイト
(URL: <http://www.meti.go.jp/> 2015. 1. 27参照)
- ・農林水産省ウェブサイト「平成25年度 食料・農業・農村白書」
(URL: http://www.maff.go.jp/j/wpaper/w_maff/h25/ 2015. 1. 27参照)
- ・柏村文郎総監修(2011)『新版酪農用語解説第2版』デーリィ・ジャパン社
- ・山岡淳一郎(2012)『放射能を背負って南相馬市長・桜井勝延と市民の選択』朝日新聞出版社
- ・南相馬市博物館市史編さん係編(2010)『おだかの歴史:民俗編2 山手の民俗金房村を中心に』南相馬市